

松崎せんべい

夕暮に眺め見あかぬ隅田川、月に風情を待乳山、帆かけた舟が見ゆるぞへ、「アレ坊が泣く、御せんは、戸棚に有るはらな」とそこへ、思いを、月雪の屑も松崎が賣り出した、撥に形どるペンペいの、中の工夫も辻占で、文句も諸君の御好で、味と風雅の三圍りで、日頃の口舌も白鬚と、心、關屋に氣を永く、身を長命寺の壽と、浮かれて久か屋根舟の、簾の内より見渡せば、土手の彼方の百眼、奥の離れの御座敷で粹な音締のせんべいを、ポットンポットンと石打ち、秋葉の原は御囃子で、跡は歸の御土産と袋を抱えて布袋額、恵比須が鯛と同様に、思ひあらしむあくび止め、御家の首尾は五福にて笑顔で渡る枕橋、あちらこちらと御運物、又石打ちの其のあとで、御披露の程、松崎の主になりて、春の魁、花子、七重の膝を八重に折りて、謹んで申す。

慶應元奉創業

銀座西四丁目角

松崎煎餅

即吟 通ふ千鳥の待つ夜の菜り

電話京橋 (561) 五〇六四
七四六九番

枕一つの淡路島

鶯亭 金升

